

まちづくりワークショップの有効性についての実証的研究*

Study on the effect of workshop for community participation*

大澤 裕**・為国 孝敏***

By Yutaka OHSAWA・Takatoshi TAMEKUNI

1. はじめに

近年、まちづくりの様々な場において住民参加型のまちづくりが盛んに行われている。その手法として、まちづくりワークショップ(以下WS)が数多く活用されている。その活用の幅は広く、身近な公園などの計画から各市町村が策定する計画など様々な分野で利用されている。それは、WSは参加者間の意見集約や参加者の共通認識を生むことに優れていることに起因している。しかしWSを用いたならば、まちづくりにおいて必ずしも成果を挙げられているものばかりではない。また、WSに関する個別事例での研究は数多くされているものの、現在、まちづくりの有効な手法として取り上げられるWSを例にしても、その有効性について十分な検討がなされているとは言い難いのが現状である。

そこで本研究では、実際に参加した栃木県下都賀郡大平町における(仮称)まちづくり交流センターWS、並びに群馬県新田郡藪塚本町における大久保地区将来ビジョンWSをケーススタディとして、比較分析を行う。その結果から、まちづくりにおけるWSの有効性を検討することを目的とする。

3. WSの意義

(1) WSとは

WSとは、創作工房という意味合いがあり1920年頃にアメリカで生まれた体験型の講座をさす。意義としては、WSは楽しく、喜びがある会議となることで、いろいろと夢中になって体験に取り組んだり、人と協力したり、あるいは議論したりのふれあいがあることである。そして、それらが相互に関与し新しい発見が

生まれることが挙げられる。また、一つの正解や画一的なモデルに向かうのではなく、それぞれの違いや多様性が創造を豊かにしていき、市民主体のまちづくり活動において重要である主体性が育まれることで市民意識を育てていく上でも大きな意義があると言える。

(2) WSの有効条件

WSを実施するにあたって、3つの要素が重要である。それは、「人」「プログラム」「場所」である。以下に具体的な内容を示す。

a) WSの目的・目標が明確である

WSにおいて、目的・目標によってプログラムが策定される。プログラムは目的・目標に沿ったWSの成果が生み出される様に工夫が必要である。

b) 対象が住民に深くかかわりのあるもの

WSの対象が、参加者である住民にとって身近であることは、活発な意見交換を期待することができる。また、参加者の意見が反映されたものへの愛着が生まれる。

c) 年齢層が幅広い

WSでは、参加者の年齢層が幅広いことで様々な立場からの意見が期待できる。

d) 住民の参加が多い

まちづくりにおいて、住民の参加が多く得られることで多くの意見を集約することができる。また、WSによって地域コミュニティを確立することができる。

e) 住民主体である

WSは、まちの使い手である住民が共通認識を持ち総合的・複合的な行為によって実現される。住民の思いや願いを集約し、反映されなければならない。

f) 住民と行政の間で情報の共有が成されている

住民だけの参加で、WSを行っても出された意見が反映されたまちづくりを行うことは難しい。行政が参加し住民の意見を聞くことによって高い成果が得られることが期待できる。しかし、行政がWSに参加し意見を聞いただけではなく、参加者が成果を確認できる情報公開の場を設け、行政を住民の間で情報が共有されることが重要となる。

*Key Words : 地区計画、市街地整備、市民参加

**学生員 : 足利工業大学大学院工学研究科都市環境工学専攻

***正員 : 工博、足利工業大学都市環境工学科

(〒326-8558 栃木県足利市大前町268-1

TEL (0284) 62-0609、FAX (0284) 64-1061)

4. 対象地域の概要 (図 - 1)

(1) 栃木県大平町

大平町は栃木県南西部に位置し、総面積 39.80km²、人口約 29,000 人の農業・工業が盛んな町である。主要産業は、機械・自動車、特産物はぶどう・いちごであり、観光農業化が図られている。大平町では、足利工業大学との官学共同研究により平成 16 年 3 月に「大平町中心市街地活性化基本計画」を策定した。現在、その中心市街地活性化基本計画を基に、行政と住民との協働で中心市街地の賑わいと活力を取り戻すための施策が行われている。

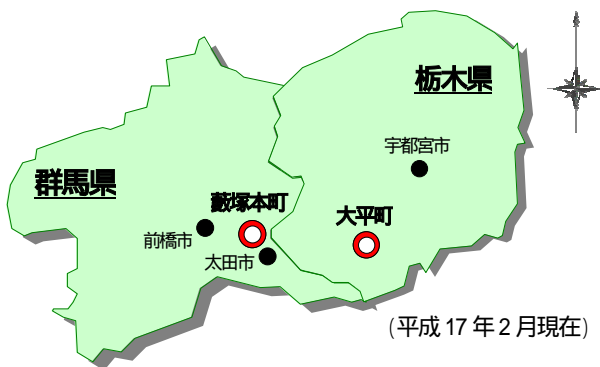


図 - 1 大平町・藪塚本町位置図

(2) 群馬県藪塚本町大久保地区

藪塚本町は、総面積 20.97km²、人口約 19,200 人で群馬県南東部に位置している。対象地域である大久保地区は町の南西部に位置し、特産物の紅小玉西瓜の生産が盛んである。大久保地区は北関東自動車道(仮称)藪塚インターチェンジの建設予定地であり、また、群馬県太田市との合併を控え(平成 17 年 3 月 28 日太田市へ合併)生活環境の変化が予想されている。このような状況を踏まえ、大久保地区住民により「住みよい大久保を考える会」が組織された。現在、大久保地区は群馬県まちうち再生総合支援事業を導入し、まちづくり活動を推進している。

5. ケーススタディの概要

(1) 大平町(仮称)まちづくり交流センターWS

大平町中心市街地活性化基本計画の市街地整備改善の一環であるコミュニケーション拠点整備として、中心市街地に立地するショッピングセンター跡地に大平



写真 - 1 大平町WS風景

町(仮称)まちづくり交流センターを整備する。計の立案にあたり、施設の利用形態、テナントの出展業種、施設の名前について参加者から意見を集約し、「人々が集い、学び、交流する場」を創り出すことを目的としている。参加者は幅広い年齢層から構成され、4つのグループに分かれて各グループ2回のWSを開催した。その後、各グループの意見を集約、設計コンペを開催し参加者からの投票によって整備計画案を策定した。

(2) 藪塚本町大久保地区将来ビジョンWS

大久保地区は北関東自動車道の(仮称)藪塚インター



写真 - 2 大久保地区WS風景

チェンジの設置により、生活環境が変化することが予想される。そこで、「住みよい大久保を考える会」を中心とした住民がWSで将来像を検討し、まちづくりの方向性を定めると

ともに、地域住民の結束力や参加意欲を高め、住民主体によるまちづくりの機運を醸成することを目的としている。参加者は「住みよい大久保を考える会」を構成する 20 代~40 代の若い世代が主体となり 3 回のWSを開催した。

6. 比較分析(表 - 1)

(1) 対象範囲による評価

まちづくりWS開催にあたり、対象範囲の決定は既に成されており、規模の大小は「点」と「面」と表すことができる。大平町WSの場合、(仮称)まちづくり交流センター整備計画の策定であることから、その施設を指し「点」と表せる。そして大久保地区WSは、大久保地区におけるまちづくりの方向性を定めると、まちづくりに対する意識の醸成となっているため、大久保地区全域をその対象地区としており、「面」と捉えることができる。「点」と「面」の区分をはっきりと定義することはできないが、対象規模の大小によるまちづくりWSの有効的な運営において、その是非は問われないと考えられる。

(2) 人数・構成による評価

まちづくりWSの運営にあたっては、対象範囲に見合った人数、構成である必要がある。一般的には、1グループ10名程度の編成とし、2グループ以上の編成が望ましいとされている。また、まちづくりの特性を考慮し、参加者が偏らない様に心掛ける必要がある。

参加者には、学生、主婦、サラリーマン、地元企業・商店主、PTA、自治会長、行政、有識者など、年齢もできるだけバラエティに富んだメンバーを集めることで、様々な角度からの意見を引き出すことが可能になる。これらの視点から、2つのWSでは条件を満たしていると考えられる。

(3) テーマ(目標)による評価

まちづくりWSを開催するには事前になぜWSを開催するのかなど、目標の明確化が重要である。また、数回のWSを開催する場合は、各々のWSにおける目標を明確に定め、参加者に周知し、WS終了後には、参加者が目標を成し遂げた達成感を持ってもらうようにする必要がある。

これらのことから、2つの事例について評価すると、大平町のWSでは、(仮称)まちづくり交流センターの整備に関するWSであることから、目標は明確に定められていたと言える。藪塚本町のWSでは、まちづくりの導入段階でのまちづくりの方向性を定めるWSであることから、参加者が多様な発意をすることで意見の集約と共通認識を得ることが目標となる。WSで行われる合意形成には、どこに住民参加の意義を求めるところによって変化してくるため、事業内容に応じて、どのような形の成果が相応しいのか、達成目標の明確化が重要である。この点においては、両地区ともにテーマに則した達成目標が明確であり、それに準じたWSが行えたと言える。

(4) 有効性の評価と課題

まちづくりWSは地方自治体をはじめ、様々なまちづくり団体が数多く実践していることから、WSはまちづくりに対して有効性を期待できると考えられる。そこで、2つのまちづくりWS事例が効果的であったのか、その有効性を評価する。

大平町では、公共施設の整備計画についての意見抽出を目的としWSを行った。WSでは、年齢と参加できる時間帯を考慮したグループ編成が行われたため、多彩かつ多数の意見を抽出することができた。そこでは住民のまちづくりに対する意識を感じることができ、WSの回数が重ねられるにつれて意見も明確になっていった。その後、参加者からの意見を集約し、それを基にした設計コンペが開催され、参加者の投票による施設整備案の採択が行われた。

大久保地区WSでは、大久保地区におけるまちづくりの方向性を定めることと、まちづくりに対する意識の醸成が目的であった。WSを行った結果、まちへの愛着や、まちづくりへの関心を大いに感じさせるものであった。主催した会は発足して間もないが、勢いを持続させるべく今後もWSを考慮した様々なまちづく

表 - 1 両地区の比較

	大平町	大久保地区
名 称	大平町(仮称)まちづくり交流センターワークショップ	藪塚本町大久保地区将来ビジョンワークショップ
テ ー マ	(仮称)まちづくり交流センター整備計画の策定	大久保地区の将来ビジョンとまちづくりの方向性について
対象となる範囲	(仮称)まちづくり交流センター	大久保地区全域
規 模	「点」	「面」
参 加 者	関係団体代表者、公募による町民	住みよい大久保を考える会
参加人数	45名	第1回:25名 第2回:18名 第3回:17名
1グループ人数	12名程度	第1回:12名程度 第2回:6名程度 第3回:5名程度
グループ数	4グループ	第1回:2グループ 第2回:3グループ 第3回:3グループ
構 成	行政職員・町民・学生	行政職員・町民
年 齢 層	10代~60代	20代~40代

り活動を継続的に進めていくことが決定された。

このような結果を分析すると、2つのケースとも数回にわたり活発な発言が行われたことで目的は達成され、まちづくりに対しその有効性は大きいものと考えられる。

今後の課題としては、WSの構成に関して、主催者の意図する提案がなされるようなプログラム作成と事前説明の徹底が挙げられる。



図 - 2 交流センター完成イメージ(大平町)

7. 既存事例での比較検証

既存研究を整理し、既存事例の対象範囲、参加者、構成、テーマ(目標)結果の項目を抽出し分析を行った。その結果、参加者から意見集約及び共通認識できたWSでは、その後、参加者の意識変容が見られる。そして、何らかの住民参加のまちづくり活動が地域に根付くことが期待できる傾向にあると言える。

実際に参加体験した2つのWS事例では、まちづくりに対する機運とWSで抽出された結果(成果)から、実働的な住民参加のまちづくり活動のきっかけとなっていることが考えられる。

表 - 2 既存事例の特徴

	ワークショップ実施結果の特徴
有効性を示す	概念的発言から具体的発言に移した
	WS終了後にまちづくりに取り組む組織が発足した
	WSを通して、住民に触発された行政に意識変容が見られた
	議論過程の透過性を高めたことで、市民の理解と参加意欲を高められた
課題	複数案を作成が作成できているが、決定方法の合意が無く、絞り込めていない
	事前説明不足と曖昧な目標設定の問題点が感想に表れていた

既存事例に見られた特徴を表 - 2 に整理する。これらは、WSのもつ機能を表したのち、その後のまちづくりに影響を与えたケースに大別できる。その中でも特に、行政の意識変容を促したケースと、WS開催後にまちづくり活動を行う何らかの組織ができたケースは、運営方法やプログラムに差異はあれWS参加における付加価値と位置付けられる。これは、WSのまちづくり手法としての有効性を示す上で重要であると考えられる。

また、**・** に関してはWSを運営する上で、主催の認識不足と目標設定の甘さ、プログラムに問題があったと指摘できる。

8.まとめ

本研究で、既存研究のレビューを行い既存事例から対象範囲、構成、テーマ、結果について抽出することができた。また、まちづくりにおけるWSの有効性について分析した結果、WSにおいて、参加者からのテーマに沿った意見集約、共通認識が得られることにより、まちづくりに何らかの影響を与えられることから有効性を実証できると考えられる。しかし、既存研究からだけでは、既存事例の十分な情報を得ることができず、WSにおいて、ファシリテータやプログラムがどのように結果に影響するのか因果関係を分析することができなかった。

これらを考慮しケーススタディに共通している事項は、以下のことが挙げられる。

- ・ WSの対象範囲が住民に深く関わりがあった
- ・ 様々な立場の参加者から活発な意見の発意が得られた
- ・ テーマが明確に定められていた
- ・ 参加者のまちづくりに対する意識の高揚が見られた

以上の事項は同時に、まちづくりWSの成立条件であると考えられる。大平町のWSでは、集約された意見から、(仮称)まちづくり交流センターの整備が具体的なものとなった。大久保地区将来ビジョンWSでは、住みよい大久保を考える会での意見集約を行ったことで、地域の現況を把握することができ、今後のまちづ

くり活動のきっかけとなることを期待できる。つまり、WSの実施によりまちづくりにおいて何らかの付加価値を与えることができた。これらのことから、今回扱った2つのWSはまちづくりに有効であったと考えられる。

9.今後の課題

本研究では、既存事例を基にWSの分析を行った。しかし、既存研究だけでは、詳細な情報を抽出することはできなかった。今後、WSの有効性を評価するうえで評価項目の検討、より多くの事例と詳細な情報の収集が必要である。したがって、WS手法を用いたまちづくりを行っている地域にてヒアリング調査やアンケート調査を行うなど、分析手法を具体化し継続的な研究が重要な課題として挙げられる。

最後に、本研究を行うにあたり、まちづくり活動の実践を通して様々な経験や勉強をさせていただきました。この場を借りて、諸々協力くださった皆様から感謝の意を表します。

【参考文献】

- 1) 世田谷まちづくりセンター：参加のデザイン道具箱 PAET 2, 1996.3
- 2) 世田谷まちづくりセンター：参加のデザイン道具箱 PAET 3, 1996.3
- 3) 足利工業大学：平成 16 年度大平町におけるまちづくり構想実施計画策定業務報告書, 2005.3
- 4) 藪塚本町：平成 16 年度まちうち再生総合支援事業報告書, 2005.3
- 5) 深沢浩志・堀口拓也：WS手法を用いた市民参加型まちづくりの現況分析,平成 15 年度足利工業大学卒業論文,2003.2
- 6) 大澤裕・根本論：まちづくりワークショップの有効性についての実証的研究,足利工業大学卒業論文,2005.2
- 7) 金俊豪・藤本信義・三橋伸夫：山村集落のアイデンティティ形成におけるワークショップの影響に関する考察 - 栃木県栗山村の事例,日本都市計画学会,都市計画論文集, No.31, pp151 ~ 7201998
- 8) 大和田清隆：東京都調布市におけるワークショップ方式による都市計画マスタープランの策定過程とその成果の評価,日本都市計画学会,都市計画論文集, No.33, pp469 ~ 474, 1998
- 9) 佐藤正吾・吉田鐵也：都市近郊農村住民のまちづくりへの意識にみる住民参加型ワークショップの有効性と課題,日本都市計画学会,都市計画論文集, No.33, pp715 ~ 720, 1998
- 10) 阿部浩之・湯沢昭：ワークショップにおける合意形成プロセスの評価,日本都市計画学会,都市計画論文集, No.36, pp55 ~ 60, 2001, など